

©FUJITSUKA Mitumasa

1941年生まれ。65年東京大学工学部建築学科卒業。65～69年菊竹清訓建築設計事務所勤務。71年自身のアトリエ設立。主な作品に「シルバーハット」(東京)、「せんだいメディアテーク」(宮城)、「多摩美術大学図書館(八王子キャンパス)」(東京)、「台湾大学社会科学部棟」(台湾)、「みんなの森 ぎふメディアコスモス」(岐阜)、「バロック・インターナショナルミュージアム・ブエブラ」(メキシコ)、「台中国家歌劇院」(台湾)など。現在、「(仮称)水戸市民会館」(茨城)、「南洋理工大學南校舎棟」(シンガポール)、「茨木市市民会館跡地エリア整備事業」(大阪)などが進行中。日本建築学会賞(作品賞、大賞)、ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞、王立英国建築家協会(RIBA)ロイヤルゴールドメダル、朝日賞、高松宮殿下記念世界文化賞、プリツカー建築賞、UIAゴールドメダルなど受賞。

東日本大震災後、復興活動に精力的に取り組む中で仮設住宅における住民の憩いの場として提案した「みんなの家」は、16軒完成。2016年の熊本地震に際しては、くまもとアートポリスのコミッショナーとして「みんなの家」のある仮設住宅づくりを進め、現在までに100棟を超える「みんなの家」がつくられた。2011年に私塾「伊東建築塾」を設立。これからのまちや建築のあり方を考える場として様々な活動を行っている。また、自身のミュージアムが建つ大三島においては、2012年より塾生有志や地域の人々とともに継続的なまちづくりの活動に取り組んでいる。

Born in 1941, Toyo Ito graduated from the Department of Architecture, the University of Tokyo in 1965, and worked for Kiyonori Kikutake Architect and Associates from 1965 to 1969. In 1971, he established his own office. Among his main works are Silver Hut (Tokyo), Sendai Mediatheque (Miyagi), Tama Art University Library (Hachioji Campus, Tokyo), National Taiwan University, College of Social Sciences (Taiwan), 'Minna no Mori' Gifu Media Cosmos (Gifu), Museo Internacional del Barroco (Mexico) and National Taichung Theater (Taiwan). His projects for Mito Civic Center (tentative title, Ibaraki), Academic Building South in Nanyang Technological University (Singapore) and Ibaraki Civic Hall (Osaka) are currently underway. He is the recipient of the Architectural Institute of Japan Prize (the Design Awards and the Grand Prize), the Golden Lion at the International Architecture Exhibition of La Biennale di Venezia, the Royal Gold Medal from the Royal Institute of British Architects (RIBA), the Asahi Prize, the Praemium Imperiale in Honor of Prince Takamatsu, the Pritzker Architecture Prize and the UIA Gold Medal, among others. After the Great East Japan Earthquake, he launched an initiative to create Homes-for-All, gathering places for disaster victims in temporary housing units, and completed 16 of them. In response to the Kumamoto earthquakes in 2016, he has overseen the building of 100 Homes-for-All as the Commissioner of Kumamoto Artpolis. In 2011, he established a small private architectural school, Ito Juku, which organizes various activities that encourage participants to consider the future of cities and architecture. He has been engaged in a variety of activities to revitalize Omishima, where the Toyo Ito Museum of Architeture, Imabari is situated, with Ito Juku members and the local community.

展覧会情報 Information

主催 | 今治市 協力 | 越智光憲、中村エミ子、藤原幸子、藤原正富、藤原ルミ、村上榮、森本賢朗、森本幸子、今治市役所 大三島支所、今治市役所 上浦支所、大山祇神社 助成 | 公益財団法人朝日新聞文化財団

ディレクター | 伊東豊雄 制作 | NPOこれからの建築を考える 伊東建築塾、株式会社伊東豊雄建築設計事務所

映像インタビュー | 佐野由佳 インタビュー映像・写真 | 田中英行、山根香 写真 | 高野ユリカ グラフィックデザイン | 丸山智也 英訳 | ジョイス・ラム

会期 | 2021年10月31日(日)～2022年9月16日(金) 開館時間 | 9:00～17:00 休館日 | 月曜日(祝日の場合は原則翌日振替)、年末

観覧料 | 一般…840円、学生…420円 ※団体(20名以上)、65歳以上は2割引、高校生以下または18歳未満無料、障害者とその介助者1名無料

今治市伊東豊雄建築ミュージアム 〒794-1308 愛媛県今治市大三島町浦戸2418

Tel: 0897-74-7220 Fax: 0897-74-7225 Mail: info@tima-imabari.jp Web: www.tima-imabari.jp

Period: 31 October 2021 to 16 September 2022 Opening hours: 9:00–17:00

Closed on Mondays (opens if Monday is a national holiday and closed on the following day) and 27 to 31 December.

Admissions for Adults aged 18 to 64: 840 yen Students: 420 yen (students are required to present their student ID card)

*Groups (20 persons or more) and elderly over 65 are entitled to a 20% discount off

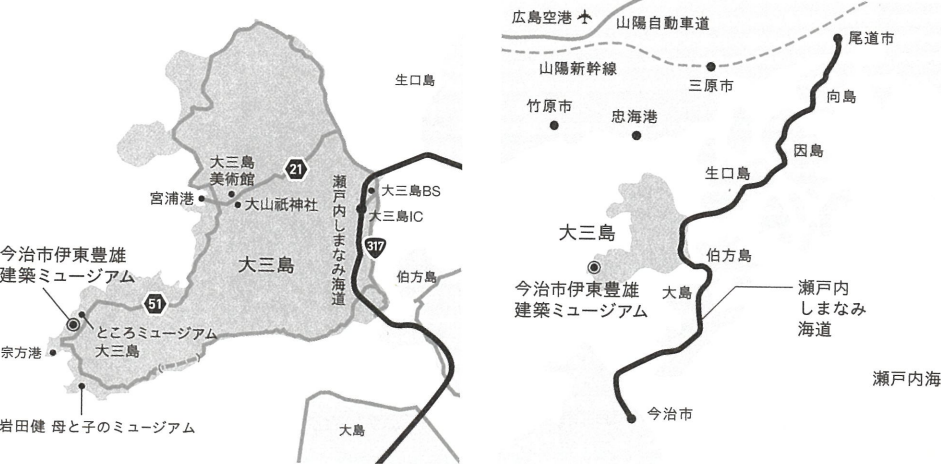
Children, high school students under 18 and persons with disability (with certification and an attendant): Free

Toyo Ito Museum of Architecture, Imabari 2418 Urado, Omishima-cho, Imabari-shi, Ehime, Japan 794-1308

Tel: 0897-74-7220 Fax: 0897-74-7225 Mail: info@tima-imabari.jp Web: www.tima-imabari.jp



アクセス Access



- 車：瀬戸内しまなみ海道「大三島IC」から約25分
- 中国[広島市・福山市]側から
- JR／バス：広島バスセンターまたは福山駅前→しまなみライナーにて「大三島BS」下車・乗換→島内路線バスにて「宮浦港」下車・乗換→島内路線バスにて「ところミュージアム」下車→徒歩約3分
- 四国[松山市・今治市]側から
- JR／バス：松山駅(JR)または松山市駅(バス)→今治駅(JR)→特急(または急行)バスにて「宮浦港」(または「宮浦農協」)下車・乗換→島内路線バスにて「ところミュージアム」下車→徒歩約3分
- 船舶：今治港→快速船(またはフェリー)にて宗方港→島内路線バスにて「ところミュージアム」下車→徒歩約3分

今治市伊東豊雄建築ミュージアム開館10周年記念展

10th Anniversary Exhibition of the Toyo Ito Museum of Architecture, Imabari “Another Utopia”

2021年10月31日[日]— 2022年9月16日[金]



©Yurika Kono

今年は私がオフィスを設立して50年、またスタートしたばかりの建築塾の塾生達と大三島に通うようになって10年。節目の年となりました。

この間オフィスでの設計活動においては、建築、とりわけ公共建築を変えたいと考えてきました。何故なら日本の公共建築は管理しやすいことが優先され、利用者にとって楽しく居心地良い建築になっていないように感じてきたからです。

この10年間そのような設計活動が続けながら、私は瀬戸内に浮かぶ大三島にも足繁く通ってきました。この島に私自身の建築ミュージアムを今治市がつくってくれた所為ですが、普段の設計活動から距離をおいて自分を見つめ直したいと考えたからでもあります。

大三島を訪れる度に私の心は和みます。大三島は穏やかで平和な佇まいを示しているからです。

しかし、その風景の美しさにもかかわらず、この島の人口は毎年減り続けています。しかも人口の半分は65歳以上の高齢者です。このまま放置すれば島は近い将来限界集落となってしまうでしょう。

若い塾生の人達と島を訪れた私達は、当初「大三島を日本で一番住みやすい島にしよう」といったスローガンを掲げて、過疎の島を再生したいと意気込んでいました。しかしこの10年間、若い移住者は少しずつ増えてはいるものの、島はほとんど変わっていません。

この間行った私達の活動もかなり限られたものでした。寂れてしまっている大山祇神社の参道に面した空き家を借りて改修し、「みんなの家」として島の人々の集まりの場にしようとしたのが手始めでした。移住してくれた若い人達がカフェなどを営みながら頑張ってくれたのですが、島の高齢者達は容易には集まってくれませんでした。コロナの影響もあってこの春「みんなの家」はしばらく活動の停止を余儀なくさせられました。

島の高齢者達は「何も新しいことをしてくれんでもええ、わしらはいまのままでじゅうぶん幸せなんやから」と言うのです。この言葉は私には重く響きます。

この人達は変わらないことを幸せだと感じているのです。変わらないことの幸せもあるのでしょうか。私がこの島を訪れて心とむのも、この島が何も変わらずに美しい風景を護り続けているからでしょうか。

私はこの50年間、建築をつくり続けてこられたことの

幸せをかみしめてきたつもりでした。でもこの島に来ると、つくらないことの幸せもあるのだという言葉に戸惑いを覚えてしまいます。

私はいま、島に移住してきた若い人達とワインづくりの活動をしています。大三島はミカンの島として知られていますが、高齢化のために栽培放棄された土地があちこちにあります。これらの畑をぶどう畑に変えて数年前からワインづくりを始めたのです。若い人達の頑張りによってぶどうの収穫は年毎に増え、今年は柑橘のワインも含めて約10,000本のボトルを生産することが出来そうです。一昨年にはしまなみ海道のパーキングエリアに建っていた仮設建築物をもらい受けて移築し、醸造所もつくられました。純大三島産のワインが生産されるようになったのです。ワインの質も年毎に良くなりました。

年末から翌年初めに出来た新酒を味わう喜びは、新しい建築が完成した時の喜びとはまた異質な喜びです。ワインをつくることの幸せ、それはささやかな活動ではあるものの、つくることの幸せです。

建築をつくることの幸せは、ワインづくりの幸せとは異なるとは言っても、私達のつくってきた建築は現在の大都市の再開発によってつくられる大規模な建築に較べればささやかなものです。東京に住む私にとって、再開発によって生まれる建築物は決して人々を幸せにする建築とは思われません。そう感じている人は私だけではないはずです。

ささやかであるという点では新しい建築に挑戦する試みと、大三島でワインづくりに励む試みは共通していると言えるでしょう。

私はこれからささやかであっても人々が幸せを感じる建築をつくりたいと願っています。人々が幸せの笑顔で満たされる社会、それが私にとっての建築をつくることの夢であり、そのような建築で埋まる社会をユートピアと呼ぶことが出来るかもしれません。

他方で私はワインづくりであれ、「みんなの家」の再開であれ、何かを変えることによって「大三島を日本で一番住みやすい島にしよう」という夢に向かっても挑戦したいと考えています。それは私にとって、「もうひとつのユートピア」なのです。

伊東豊雄

映像出演者

1. 越智光憲(民生委員／元役場職員)
2. 藤原幸子(旅館女将)
3. 中村エミ子(農家／元保母、元海運業)
4. 藤原正富、藤原ルミ(農家、薬店経営)
5. 森本賢朗、森本幸子、村上榮(農家)



1



2



3



4



5

©Kaori Yamane

Interview

and remained unchanged?

For the past 50 years, I had indulged in the happiness to have been able to continue making architecture. But when I came to this island, I was confused to hear that there is such a thing as happiness in not creating.

I am now working with young people who have moved to the island to make wine. Omishima is known as the island of mikan (mandarin oranges), but due to ageing population, there is a lot of abandoned land here and there. A few years ago, we converted these farmlands into vineyards and started making wine. As a result of the hard work of these young people, the grape harvest is increasing every year, and we will be able to produce about 10,000 bottles of wine, including citrus wine this year. The year before last, a temporary building that was originally built in a parking area on the Shimanami Kaido was acquired and relocated to create a brewery. We are now producing wine that is truly local and authentic to Omishima. The quality of the wine is also improving year by year.

The joy of tasting a new wine at the end of the year or at the beginning of the following year is a different kind of happiness compared to the joy of completing a new building. The happiness of making wine—no matter how small the activity is—is the happiness of creating.

Although the happiness of making architecture is different from the happiness of making wine, the architecture that we have made is quite modest compared to the large-scale architecture that is being built as a result of redevelopment in big cities today. For me, living in Tokyo, these buildings that are being created by redevelopment do not seem to be buildings that make people happy, and I am sure that I am not the only one who feels this way.

In terms of being modest, my attempts to challenge creating new architecture and my attempts to make wine in Omishima have a lot in common.

I want to continue creating architecture that makes people feel happy, however small or modest the scale is. When I create architecture, it is my dream to achieve a society filled with people smiling with happiness, and we might be able to call a society that is filled with such architecture—a utopia.

On the other hand, whether it is through making wine or reopening Home-for-All on Omishima, I would like to continue challenging and working towards my dream of making Omishima the most livable island in Japan. To me, this is “another utopia”.

Toyo Ito